

# つぶやき



## 多様性について思う

北海道教職員組合 茂泉 雅美

最近、「多様性」という言葉をよく見聞きするようになった。実際、私たちが生きている世界で、多様性が認め合えればもう少し窮屈じゃなくなるのでは、と思うことも多い。ロシアとウクライナの問題、人種差別、LGBTQ…、それはもう、ありとあらゆる場面で。「多様性を認める」とは、しかし、どういうことか。ただ、「こんな人もいる」と知るだけでは足りない。自分とは違う誰か、その「相手も大事にできる」ということが不可欠だと私は思う。それは、人権の尊重にほかならない。子どもたちが、育っていく過程の中で柔らかい心のうちにぜひ培っておきたい分野だ。

学校の中で、どうすれば多様性を認め合えるようになるだろうか。昨年度私は、支援学級担任であった。感覚過敏のAさんは、学校に着くなり衣服が濡れた！とおかんむり。天候に怒りながら服を脱ぎ捨てすっぽんぽん。多様性を認めるには…？ルールを作り、彼のスペースを準備し、他の誰にも見られないなら、落ち着くまで全裸もあり。支援級同クラスの友達が笑うことに対しては、本人もつらいことを説明し、笑われたらどう感じるか考えさせた。すっぽんぽんがかわいくて、つい、私も笑いたくなるころだが、ここはガマン。寄り添うことでAさんを孤立させないようにした。

支援級を持ちながら、6年担任に「多様性を考える取り組み」をやらせてほしいと持ちかけた。6年担任団も組合員の仲間で、快諾してくれた。新聞の切り抜きから、自分たちの考えを紡いでいく学びを、朝学習でやらせてもらった。ブラックライブズマターなど、旬の話題を取り上げて、どうして人種差別をしてしまうのか、などについて一緒に考えた。毎回、自分の言葉で考えたことを紙面で伝えてくれた6年生。3月の卒業近く、1時間頂いて授業をしに初めて6年教室へ。私がまず、みんなと違うことをして受け容れてもらおうと考え、始まるなり簡単な韓国語と英語で自己紹介した。しかも、「I am a HENJIN.」私は

変人です！みんな、え？という顔。板書して、「変人」の漢字2文字の間に「えていく」を入れた。「変えていく人」。何を变えていくと思う？と子どもたちに問いながら、授業を進めていった。初めての授業だったが、その時間の中で全員が自分の意見を発表してくれた。意見を言い合えるというのは、お互いを認め合えているということ。担任の日頃からの指導が良かったおかげだ。日本では、「変わっている人」は、避けられやすい。変わっていると思われたくなくて意見を言えないこともあるかもしれない。だけど、本来、誰が何を言ってもいい。誰かを傷つけたりしなければ。多様性って、まず、身近なところから。ちょっと変わっている人もいていいと思えるところから出発すればいいんじゃないかな、とゆるく思っている。

今年度は、普通学級1年生担任。1年生は多様性のるつぼだ。おなかのすいてもう勉強なんてしたくないと泣いて怒り出す子。元気がなくなっちゃったと授業中にふらふらとやってきて私の手を握る子。学習と多様性の共存ってどうすれば…？その答えは、子どもたちが教えてくれた。怒り出す子の特性、疲れちゃう子のその日の状態。みんながお互いをわかってきて、それはそれ、として授業は進んでいく。まだ並ぶのが苦手、話を聞くのが苦手、1年生の多様性の中には、未発達の部分も多い。教室があたたかく見守る場所であるなら、その中で安心して伸びていくことを願う。ゆっくり成長するのも立派な多様性だ。見ていると、この子にはこういう言い方が伝わる、などと場に応じて話している。相手のことを考えながら。子どもの思いやりにはいつも救われる。うっかりな担任という特性についても、認めながらつきあってくれているようだ。

目下、困っているのは、大人の「多様性を認めない」という多様性。どう向き合っていこうか。まあ、ぼちぼち、私の気持ちを伝えていこうかと思う。相手も大事にしながら。